カミュの *Le Premier Homme* について

松　本　陽　正

1

1960年1月4日、交通事故死したカミュが鞄の中に持っていた遺作 *Le Premier Homme* が、34年の歳月を経てこの4月ついに刊行された。カミュ研究者が待ちわびていた、幻の書ともいうべきあの自伝的作品の原稿がついにその全貌を現したのである。

カトリーヌ・カミュによる「編者による注釈」によれば、「ペンの赴くままに書きつけられ、時にはポワンやヴィルギュルも打たれておらず、素早い筆跡で、解読するのが困難な、一度も推敲されていない」(p.8) 原稿という。4ページにわたって挿入されている原稿の複写をみると、そのことがよく分かる。確かに、推敲の跡がみられぬ文である。カミュにあっては珍しく、息の長い文が続き、なかには2ページ近くに及ぶ長文もある。また、脚注にも指示があるように、作中人物の名前を取り違えている箇所も多い。だがそれ故にこそ、作家の制作現場に立ち会っている思いにとらわれるし、作家の息づかい、作家の生の声を聞く思いのする作品である。

未完の作品原稿にもかかわらず、*Le Premier Homme* は刊行来、異常なまでの売れ行きを示し、話題を呼んでいる。「エクスプレス」誌によれば、発売直後に小説部門のベストテン入りし（6位)、翌週（4月14日～20日）以降は3週連続トップにたち、その後も上位にランクされ続けているのである。

異常ともいえるこの人気、それにはいくつかの理由が考えられよう。まず浮かぶのは、デュラス『愛人』に代表されるような、自伝ブームといってもいい動き、自伝的作品への読者の関心の高まりである。刊行以来、700万部も売れ

ている、永遠のベストセラーともいうべき『異邦人』の作者の自伝への関心がその底流にあったことは否定すべくもない。

さらにはまた、ベルリンの壁崩壊、ソビエト連邦の解体といった政治情勢の変化に呼応した、カミュ再評価の動きも指摘できよう。*Le Premier Homme* 刊行後のことではあるが、「ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」誌の「カミュの勝利」と題する特集号に、J．ゲランは「カミュの復讐」（副題は「彼の唯一の過誤は万人に先駆けて正しかったこと」）と題する論文を寄稿し、一貫して全体主義に反対の姿勢を貫いたカミュの政治行動の軌跡を辿りながら、1946年にすでに「イデオロギーの終焉」を宣言していたカミュの先見性を高く評価し、ボスニアの悲劇と照らし合わせながら、アルジェリア戦争時のカミュの「市民休戦」への訴えかけが流血回避の上でいかに有効な手段であったか等々を指摘し、カミュは「ヨーロッパ思想のパイオニア」pionnier de l'idée européenne との讃辞を贈っているのはその好例であろう[1)]。

しかし、*Le Premier Homme* が人気を博した最大の理由は、未完とはいえ、巨匠の大作を彷彿させるその内容にあったというべきだろう。先に紹介した「ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」誌の中で、J．ダニエルは「驚嘆すべき下書き」prodigieuse ébauche とこの作品を形容しているが[2)]、カミュのそれまでの作品に比べ、読む者の胸を打つ感動的な場面が数多く見受けられ、しかも壮大な叙事詩の草稿に触れる思いのする作品となっているのであって、そうした点にこそ人気の秘密を求めるべきだろう。

2

Le Premier Homme の前作『追放と王国』刊行の翌年にあたる1958年、処女作『裏と表』の再刊に際し、カミュは「序文」を付け加えた。その中で、カミュは『裏と表』こそが自らの「源泉」source[3)]であるとし、いつの日か「自分が夢見ている作品」を、「いずれにせよ、『裏と表』に似ていて、ある愛のかたちについて語る」[4)]作品を書くだろうと述べ、『裏と表』の世界への回帰の決意を表明していたのであった。カミュが夢見ていたこの作品が *Le Premier*

Homme であることは衆目の一致するところである[5]。

ところで、よく知られているように、1935年5月、『手帳Ⅰ』の冒頭に、カミュは、「息子のありとあらゆる感受性を作り上げる、息子が母親に抱く奇妙な感情」[6]という『裏と表』の主題を書きつけ、さらに続けて「作品は告白だ。僕は証言しなければならない」[7]とする当時の自己の芸術観と創作への決意とを披瀝していた。このように、『裏と表』が告白的エッセーであり、そして *Le Premier Homme* が『裏と表』への回帰を示すものであるなら、この遺作でカミュは「告白」へ、自伝へと回帰しようとしたのだろうか？すなわち、我々は *Le Premier Homme* を「自伝的作品」と形容してはきたが、それでは、*Le Premier Homme* ははたして自伝なのだろうか、それとも虚構なのだろうか？この確認から、論を進めたい。

作品の中には、カミュの伝記的事実と符合する言及が数多く見出される。例えば、主人公ジャック・コルムリとカミュの誕生の年（1913年）は一致しているし、また父の召集を機に、ベルクールの祖母の元に身を寄せる主人公の一家、そしてそこでの生活はカミュ自身が体験したものと思われる。簡単な説明にとどめたが、枚挙にいとまがない程の自伝的要素の多さから、この未完の小説は、「〈直接的な〉小説、つまりこれまでのように計算された神話の類とは違う小説」[8]であり、カミュ自身の自伝的世界の再構成といっても過言ではない側面を持っている。

ところで、伝記的事実との関連で、一つの日付が我々の興味をそそる。それは、カミュ40歳にあたる、1953年である。すでにカミュは、R．キーヨにあてて、40歳という年が「自分の仕事ならびに生活のある種の転換点 charnière と明らかに一致したものとなっている」[9]との証言を残していたのだが、『反抗的人間』の刊行（51年）、サルトルとの論争ついで訣別（52年）に続くこの年が、決定的な節目の年になっただろうことは想像に難くない。また、この53年夏、妻フランシーヌが病に倒れたことも[10]、この年が大きな「転換点」となっている理由ではないだろうか？

こうみてくると、作品で、主人公ジャック・コルムリが父の墓参を40歳で行

う設定になっているのは極めて興味深いことのように思われる。ところが、実際にカミュが、サン＝ブリューに父の墓参りをしたのは、1953年ではなく、47年夏のことなのである[11)]。この伝記的事実のすりかえに、あくまでも40歳を「転換点」として捉えようとするカミュの意識がみてとれるのである[12)]。

このような意図的な伝記的事実のすりかえだけではなく、「小説」である以上当然のことではあるが、作品の中には虚構化の操作も行われている。後にみる、聖書の世界を想起させる冒頭の誕生の場面などは純然たる想像の産物であり、カミュ自身が予告したように、*Le Premier Homme* は「想像力の作品」[13)]といえる側面をもあわせ持っているのである。虚構化の操作はなによりも、主人公の名を「ジャック・コルムリ」とした点に認められるだろう。とはいえ、主人公の母をつい「カミュ未亡人」(p.189) といったり、ベルナール先生を「ジェルマン先生」(p.138) といっている例もみつかったりもするのだが。

このように、*Le Premier Homme* はいわば虚構的自伝ともいえる作品である。しかしながら、どこまでが自伝でどこからが虚構かを問う意味は、あまりあるまい。重要なのは、なによりもまず、作品の芸術的完成度にあるのだから。そして第二には、カミュ自身が回帰を表明した『裏と表』との間に存在する類似性と差異に、とりわけエッセーと小説というジャンルの違いはあるとはいえ、両作品の間に存在する、歳月の隔たりによって現れ出た、描出された世界の差異にあるのだから。

本稿では、作品の芸術性に触れつつ、具体的には母・祖母・叔父・父像の変遷を中心に、『裏と表』の世界との類似性と差異を指摘し、*Le Premier Homme* の特色を浮かび上がらせ、カミュの変化を考察してみたいと思う。

3

『裏と表』の巻頭を飾る『皮肉』には三つの短いエッセーがおさめられているが、その第三番目の冒頭部にはカミュの過ごした少年時代の家庭の姿が示されている。

Ils vivaient à cinq : la grand-mère, son fils cadet, sa fille aînée et les deux enfants de cette dernière. Le fils était presque muet; la fille, infirme, pensait difficilement, et, des deux enfants, l'un travaillait déjà dans une compagnie d'assurances quand le plus jeune poursuivait ses études. A soixante-dix ans, la grand-mère dominait encore tout ce monde[14].

母と兄それに祖母と叔父との貧しい共同生活、不具な母と叔父、支配者は祖母、確かに、基本的な構図は *Le Premier Homme* でも同じであり、「再刊への序文」で言っていたとおり、*Le Premier Homme* においてカミュは、『裏と表』の世界へ、「貧困と光の世界」[15]へ、「一人の母親のすばらしい沈黙とその沈黙に釣り合う正義や愛を再び見出すための一人の男の努力を中心に据え」[16]た作品へ回帰しようとしたといえるだろう。「カミュ未亡人　この書を決して読むことのできぬあなたへ」という母への献辞がなによりも雄弁にこのことを物語っていると思われるし[17]、巻末に付された「ノートとプラン」から母は結末部でも重要な役割を果たすことになっていたと推測されるのである（p.319 ならびにp.320参照）。

母の描き出しているイメージは基本的には『裏と表』と同じである。「耳が不自由」（p.79）で、言葉がうまく喋れず、祖母の鞭から子供を守ってやることもできず、昼間は「家政婦」domestique（p.187）として働き、辛い一日の労働が終わると、夕闇に溶け込んだままじっと外の光景を眺め続けている沈黙した母。

ところで、『裏と表』では、「分けへだてのない愛情で子供たちを愛しているのだが、子供たちにそれが示されたことは一度もなかった」[18]母の愛への、子供が恐怖すら覚えた母の「動物のような沈黙」[19]への、もの言わぬ母の「無関心」への理解に至る道程が記されていたのだが、*Le Premier Homme* では、なにげない言葉で、「その優しく美しい目」（p.56）で、「つつましい微笑み」（p.159）で、少年ジャックへの愛が伝えられている。遊びで遅くなり、祖母に鞭打たれ、溢れようとする涙を必死にこらえるジャックに、「スープをお飲み、

もういいんだよ、もういいんだよ」(p.56) と言葉をかける母、その言葉にジャックは涙するのであった。祖母に平手で打たれた時も、母は「悲しげな微笑み」(p.160) を浮かべジャックを見つめている。リセの賞授与式で一等賞を取ったジャックを見つめ微笑みながら「お前、よく頑張ったねぇ」(p.235) と声をかける母、そのすぐ後には夜の光景を眺めるいつもの母に戻るとはいえ、このような幼い子供に対する母の優しさの具体的な叙述は『裏と表』にはないものだった。そして、母の慈愛あふれる微笑みや美しい眼差しは、後述するが、聖母マリアのイメージと重なり合い、『裏と表』に比べ、純化された母親像が提出されているといえよう。

それでは、祖母はどうだろうか？ *Le Premier Homme* においても、祖母は一家の支配者であり、鞭で子供たちの教育をし、虚栄心の強い女として描かれていることに基本的には変りはない。家計の足しにと、年齢も雇用期間も偽って、ジャックをリセ3年次の夏休みから働きに出しさえする。遊びで遅くなったジャックを待っているのは、相変わらず鞭だ。だが、サッカーの試合を観るため、便所に2フラン落としたとジャックが嘘をついた時、汚物に手を入れ金を探す祖母は、単なる吝嗇な女を越えた存在である (p.87参照)。そうだ、もはや、ジャックには分かっているのだ、「学校も余暇も知らず、子供の時から働き、しかも休みなく働いた」(p.240) 祖母の吝嗇も虚偽も貧しさゆえのことと、祖母もまた貧しい生活の犠牲者なのだということが。映画館での祖母の虚栄心、つまり文盲だと気付かれまいと、「読んでおくれ、眼鏡を忘れたからね」(p.93) と周囲に聞こえるよう大声で予め言っておいて、ジャックに字幕を読ませる姿は、喜劇的だが、微笑ましくさえある。のみならず、感動的な筆致で描かれている場面さえある。ベルクールの子供たちがそうするように、小学校卒業後はジャックを徒弟奉公に出す予定だった祖母のもとに、ベルナール先生が奨学生としてリセへの進学を勧めに説得にき、ついにそれを承諾した後、「はじめてジャックの手を、とても強く、絶望的な優しさをこめて握りしめ」る祖母の姿は感動的でさえある。夜遅くまで勉強するジャックに「悲しみと誇りの入り交じった」(p.153) 眼差しを注ぐ祖母の思いは読者に十分伝わって

くる。このような祖母の思いを『裏と表』当時も理解していなかった訳ではあるまい。しかし、22歳では、その裏面しか描けなかったものが、歳月の経過をとおして、客観化され、生身の祖母像が描きだされているのである[20)]。

なにも祖母像だけではない。こうした客観化は *Le Premier Homme* では随所でなされている。『裏と表』ではほんの一面しか告げられなかった過去が、*Le Premier Homme* ではさまざまな領域にわたって描き出されているのである。家族にまつわることや自然描写は別にしても、ベルクールでの「惨めだったが幸せな子供の頃」(p.127) のさまざまな遊び、登校時のいたずら、ベルナール先生、「決闘」donnades (p.144)、初聖体拝領式、奨学生試験の日のこと、そして「未知の世界」un monde inconnu (p.186) だったリセに通うようになって味わった二重生活(p.230参照)、登校風景、リセでの授業やサッカー、下校時の様子、友人ピエールとの毒薬作り、図書館、賞授与式の日のこと、夏休みの仕事等々、一人の少年の姿が活写されているのである。いわば過去が、全体的に、客観的に捉え直され、リアルに描き出されているといえよう。

「リアルに」と書いたが、作風も新たな傾向を示している。というか、むしろ、『追放と王国』で顕在化した、レアリスムの深化が示されているというべきだろう[21)]。写実的な描写は至る所に見受けられるが、ここでは一例として、ジャックが同席を強いられる、祖母が雌鶏を殺す場面をあげるにとどめたい。

> La grand-mère poussait en effet l'assiette juste sous la lumière de la petite lampe à pétrole placée sur une table de bois, à gauche de l'entrée. Elle étendait la bête sur le sol et, mettant le genou droit à terre, coinçait les pattes de la poule, l'écrasait de ses mains pour l'empêcher de se débattre, pour lui saisir ensuite dans la main gauche la tête, qu'elle étirait en arrière au-dessus de l'assiette. Avec le couteau tranchant comme un rasoir, elle l'égorgeait ensuite lentement à la place où se trouve chez l'homme la pomme d'Adam, ouvrant la plaie en tordant la tête en même temps que le couteau entrait plus profondément dans les cartilages avec un bruit affreux, et maintenait

la bête, parcourue de terribles soubresauts, immobile pendant que le sang coulait vermeil dans l'assiette blanche, Jacques le regardant, les jambes flageolantes, comme s'il s'agissait de son propre sang dont il se sentait vidé. (pp.214-215)

すでに、祖母を否定的にばかり捉えるのではなく、客観的に捉え直し、自己の少年時代を客観視しようとする傾向をみてきたが、もう一つの方向性として、そしてこれは母の純化と同一のものだが、いわば、聖家族化への方向性が指摘できる。「聖家族化」については、白井浩司氏がつとに指摘しているが[22]、*Le Premier Homme* においてはその傾向が際立ってくるのである。ここでは一人の叔父を例にとり、イメージの変遷を具体的に検証してみたい。

カミュが少年時代ベルクールの祖母の家で同居していた、言葉と片足の不自由な樽職人の叔父エチエンヌ[23]については、『裏と表』では、すでに引用した『皮肉』での「唖者同然だった」との短かい言及がなされているだけである。習作『幸福な死』にも、叔父がモデルと目される、姉と暮らし、犬を飼っている樽職人のカルドナが描かれている。「耳が聞こえず、半ば口もきけず、意地悪で乱暴者」[24]のこの樽職人は、姉が恋人を家に迎え入れたために、喧嘩を引き起こし、姉が家を出てからは、毎晩カフェに入り浸り、汚れた暗い部屋に帰る時間をできるだけ引き延ばしている。彼は、主人公メルソーにザグルー殺害を決意させる、貧民街に生きる孤独な人間の悲惨を具現する人物として示されていたのであった。*Le Premier Homme* の前作『追放と王国』所収の『唖者』は、周知のように、片足の不自由な樽職人イヴァールを主人公とした中編である。この作品の中では、イヴァールは不具とはいえ、若いころは水浴を楽しみ、生を謳歌し、40歳になった今は静かなささやかな幸せをかみしめているというふうに、昇華されたイメージが提出されていた。

ところで、*Le Premier Homme* になると、エチエンヌという実名のまま[25]、さらに純化されたイメージで描き出され、耳が聞こえず、片言の言葉しか喋れぬ、樽職人の叔父にまつわる思い出のためにわざわざ一つの章がさかれること

となる。エチエンヌも、カルドナ同様、カフェに入り浸ってはいるが、カルドナにとってカフェが「孤独の恐怖に対する最後の避難所」[26]であったのに対し、エチエンヌは、知る限りの言葉を駆使して、座を賑わすカフェの人気者である。また、カルドナのように犬を飼っているが、カルドナの犬が生活の惨めさを象徴的に示していたのに対し、エチエンヌが犬を飼っているのは、主人公ジャックも誘われて行く楽しい狩りのためである。エチエンヌも、若い頃のイヴァールのように水泳を愛し、幼いジャックをよく海につれていく[27]。さらにはジャックが毎木曜日遊びにいったエチエンヌの働く樽工場は、『唖者』で描かれていた余儀なくされた沈黙の支配する樽工場とは異なり、なんと活気にあふれていることだろう。リセに通い始めた三年目の夏休み、祖母から働きに出ることを強いられ、事務所での空しい仕事を体験したジャックは「自分にとって本当の仕事とは例えば樽作りの仕事だ」(p.246)と思うのである。ジャックに対する叔父の「殆ど動物的なまでの愛情」(p.118) がよく伝わってくる、樽工場での事故のエピソードも盛り込まれている。姉が恋人を家に連れてきたために一騒動起こす場面もリアルに描かれ、また短気な側面も示されてはいるものの、叔父のジャックを見る目はあたたかいし、ジャックの叔父への思いは美しい。このような叔父像の変化は、カミュの聖家族化への志向を明瞭に示しているといえよう。一例として、狩りからの帰り道、言葉なしに通じ合っている二人の姿が描かれている場面をあげておく。

> Près de la maison, dans la rue obscure, l'oncle se retournait vers lui : 《Tu es content?》 Jacques ne répondait pas. Ernest riait et sifflait son chien. Mais, quelques pas plus loin, l'enfant glissait sa petite main dans la main dure et calleuse de son oncle, qui la serrait très fort. Et ils rentraient ainsi, en silence. (p.108)

聖家族化への志向をなによりもよく示しているのは、冒頭の誕生の場面であろう。この場面は、キリストの生誕を思わせるものがあるし[28]、暖炉の光の

下での誕生はジョルジュ・ド・ラ・トゥールの絵を想起させるものがある。このように、語り手は自らの誕生の場面に聖書的イメージを付与し、自伝的世界を聖書的世界へと昇華させているのである。「ノートとプラン」には、「ママン。無知なムイシュキンのようなひと。ママンはキリストの生涯を知らない、十字架でのことを別にすれば。それでも、ママンは（ムイシュキンより）キリストの近くにいるのではないだろうか？」(p.295) として、文学に現れた無垢の典型ムイシュキン以上にキリストに近い存在として母を捉えているが、作品の冒頭の場面では、母はいわばマリア化されているといえよう。

もっとも、これはカミュのキリスト教への接近を告げるものではあるまい。彼の作品にあっては初めて、キリスト教体験から受けた少年の傷が、そしておそらく終生癒され得ないだろう傷が、*Le Premier Homme* に記されているのはきわめて興味深いことである。それは主人公ジャックが主任司祭から受けた平手打ちである(p.158参照)。おそらくこれは事実ではなかろうか？この体験がムルソーやリウーの頑なまでの神への反抗心の原体験となったと推測されないだろうか？

話が少し横道にそれたが、主人公の誕生と父の入植を描いた冒頭部やあるいは48年の革命家の入植時の雄々しい場面は、すでに触れたように、壮大な叙事詩を読む思いのする出来栄えとなっている。しかも主人公は、父やさらには48年の入植者と繋がり、一つの「部族」tribu「民族」raceの系譜に属しているという意識を抱いているのである。内容の上からもまさに叙事詩的趣のある作品となっているのである。「部族」「民族」の問題については、次章で述べるとして、いまは、*Le Premier Homme* には、客観化・聖家族化・叙事詩創造という、一見すると相矛盾する、方向性があることを指摘しておきたい。

4

Le Premier Homme において新たに現れ出た大きなテーマが「父」である。父については、『裏と表』『異邦人』『ギロチン』などにおいて短かい言及がなされているだけだった。しかし、それ故にこそ、いわば「不在の父」ともいう

べき一つのテーマが形成されていたのであった。ここでは、『裏と表』での言及を振り返ることから始めたい。

《C'est vrai que je ressemble à mon père?

— Oh, ton père tout craché. Bien sûr, tu ne l'as pas connu. Tu avais six mois quand il est mort. Mais si tu avais une petite moustache!》

C'est sans conviction qu'il a parlé de son père. Aucun souvenir, aucune émotion. Sans doute, un homme comme tant d'autres. D'ailleurs, il était parti très enthousiaste. A la Marne, le crâne ouvert. Aveugle et agonisant pendant une semaine : inscrit sur le monument aux morts de sa commune.

《Au fond, dit-elle, ça vaut mieux. Il serait revenu aveugle ou fou. Alors, le pauvre...

— C'est vrai.》[29)]

同じエピソードが *Le Premier Homme* でも繰り返し語られているのだが、決定的な違いは、語り手の父への思いである。『裏と表』では、上に引用したように、父の思い出は語り手に「実感」も「感動」もないものであり、語り手は「きっと、ありきたりな男だったのだろう」との思いしか抱かない。それに対して、*Le Premier Homme* では父の探求が一つの大きなテーマとなってくる。紙幅も限られているので詳しい紹介はさし控えるが、二部まで書かれたこの遺作の第一部のタイトルが「父の探求」となっていることをまず指摘しておきたい。40歳になっての墓参、父の面影を求めての自らの生地訪問[30)]、母や叔父エチエンヌへの質問、父と接触した人物への照会... 父の痕跡を空しく求める語り手の脳裏でいつしか父は理想化され、英雄化され、すでに見たように、小説の冒頭部では聖書的世界の住人になっている。「ありきたりな男」ではない。葡萄畑の管理人として、敵意に満ちた未開の土地に雄々しく乗り込む男である。家族への愛情も深く、フランスへの出征直前、ベルクールの家族のもとを訪れるシーンは胸を打つ(pp.67-68参照)。

ところで、戦災孤児ジャックには、少年時代、実の父に代る存在がいた。ある意味ではエチエンヌ叔父もその役割を果たしているが、なんといってもそれはカミュの小学校時代の恩師ルイ・ジェルマンがモデルと目される小学校教師ベルナールである。語り手は、一般論として、リセの教師に比べ、「生徒が全的に依存する小学校の教師」は「父親に近い存在だ」(p.203) としているが、ベルナール先生はジャックにとってまさしく父親に代る存在だった(p.129参照)。ジャックの父同様、第一次世界大戦に出征したベルナール先生もまた、あたかもわが子のようにジャックに愛情をそそぐ。この点でベルナール先生がジャックを「息子」mon fils (p.162) と呼ぶのは示唆的だ。二人の心の交流を描いた場面は感動的であり、とりわけ別れのシーン、《homme》への旅立ちのシーンは忘れがたい印象を読む者の心に残すのである(p.163参照)[31]。

5

それでは、《*Le Premier Homme*》なる表題は一体誰を指しているのだろうか？いくつか根拠があるが、なによりも、第二部のタイトルが「息子あるいは Le Premier Homme」となっている以上、この言葉が第一義的には主人公ジャック・コルムリを指していることは間違いない。では、この言葉には一体いかなる概念が託されているのだろう？1954年、フランク・ジョットランのインタヴューに答えて、カミュは「ゼロから出発する premier homme を想像している」[32]と述べているが、巻末に付された「紙片」と「ノートとプラン」双方に「彼は幼年時代を再び見出すが、父を見出しはしない。彼は自分が premier homme だということを知る」(p.265, p.306)という同じ表現が見つかる。進むべき道を教えてくれる父もなく、文盲の家族の中、貧民街で成長し、裕福な家の子弟が通うリセという「未知の世界」へ踏みだし、自分一人の力で「ゼロから」人生を切り拓いていかなくてはならぬジャックこそまさに《premier homme》に他ならない。しかしながら、ここで注意しておきたいのは、《premier homme》がジャックだけを指すのではないということである。「教訓もなく、遺産もなく、生きることを学ばねばならぬ、父のない」(p.70)孤

児たちもまた《premiers hommes》といえよう。なにも父のない子供とは限らない。「過去」「歴史」「伝統」「先祖」「祖国」、それに「宗教」や「神」といった、いわば「父」なるもの、道しるべとなるものをもたず、独力で未来を切り拓かねばならぬ人々が、《premiers hommes》なのである。父の面影、入植時の姿を追い求めるジャックの脳裏に、未開の土地に乗り込んできた48年の革命家たちの姿が浮かぶ。敵意に満ちたアラブ人たちの脅威に晒され、多大の犠牲を払いながらも、未知の国に根付こうとし、自分たちの力だけで生きそして死んでいった無名の彼らもまた《premiers hommes》であり、その60年後、身重の妻と子供を連れ、アルジェリアに雄々しく入植した父もまた、《premier homme》なのである。父を通し、ジャックは48年の革命家たちに自分が結ばれているのを感じ、自分たちは一つの「部族」「民族」を形成しているとの自負が生まれるのである(pp.179-181参照)。

ところで、「ノートとプラン」に、おそらく《premiers hommes》を指すのであろう、「信仰」も「神」も何も持たぬ人々には、「名誉」が唯一の規範となることが記されている。

> 《Tels que nous sommes braves et fiers et forts... si nous avions une foi, un Dieu, rien ne pourrait nous entamer. Mais nous n'avions rien, il a fallu tout apprendre, et vivre seulement pour l'honneur qui a ses défaillances...》 (p.281)

カミュにおける「名誉」honneur については、すでに別のところで論じ、それが《homme》の価値と繋がっていると述べたことがあるが[33]、《premier homme》である主人公ジャックはまた名誉を重んじる少年でもある。相手がいかに頑丈であろうと、彼は侮辱には耐えられない。「お気に入り」chouchou との陰口に、「実際、反発せずに、こんな侮辱を受け入れることは名誉 honneur を失うことになる」(p.143) と、すぐさま相手に侮辱の言葉を返し、「男の義務」son devoir d'homme (p.145)を果たし、「決闘」を挑むのであった。この

ように、*Le Premier Homme* においても、「名誉」と《homme》とは結びついているのである。

タイトルに含まれている《homme》という語には、「人間」「(一人前の) 男」といった意味が含意されているのは言うまでもない。作品中でも、当然のことながら、この言葉は多用されているのだが、日本語に訳す場合「人間」とするよりもむしろ、「男」とした方がよい場合が多いように思われるし、とりわけ重要な場面ではそうであるように思われる。今しがた例にあげた、《son devoir d'homme》などは「男」とすべきだろう。また、「給料を家に持ち帰るため夏中働き」(p.253)、その金を黙ってテーブルの上に置いた時、ジャックは叔父から《Toi, un homme》(p.252) と声をかけられるのだが、ここなども「(一人前の) 男」とすべき箇所だろう。紙幅の都合上、もう一例だけにとどめるが、先程、父もまた《premier homme》の系譜に属すると指摘したが、父の入植と主人公の誕生の描かれた作品の冒頭で、父の名が「アンリ」と知らされるまで4ページ近くにわたって、父が11度も《l'homme》と呼ばれていること、しかも「アンリ・コルムリ」というフルネームが知らされるまでさらに4ページ近くにわたって20度も《l'homme》と呼ばれ続けていることに注目したい。この場面では、主人公の未来の母は《une femme》《la femme》《sa femme》と呼ばれ、対置されており、従ってこの場合の《l'homme》には「男」という訳語しかあてはまらない。確かに、すでにみたように、叙事詩的語りの上から、さらには聖書的世界を現出させるうえで、固有名詞ではなく、《l'homme》という無名性の語の使用は効果的だとは思う。しかしながら、小説の冒頭部での《l'homme》という語のこの頻出には、タイトル (*Le Premier Homme*) と絡めようとするカミュの意図があると思われるのである。すでに述べたように《homme》を「人間」とした方がよい箇所も勿論あるし、また「男」とすると語の意味を狭めることになることも承知している。*Le Premier Homme* については、『最初の人間』という訳語がほぼ定着した観があるが、作品内容の上から、むしろ『最初の男』とした方が適切ではないかとの思いもあり、本稿では、*Le Premier Homme* という原題をあえてそのまま使用してみた。

6

Le Premier Homme はリセ時代の途中までで、つまり「子供」から《homme》になるまでで終わっている(pp.252-253参照)。今後の展開については、「紙片」や「ノートとプラン」や『手帳Ⅲ』から、「バカロレア」「病気」(p.273)へと書き進められ、ついで恋愛、共産党問題、イタリア旅行、レジスタンスへとストーリーが展開されていく予定だったことがわかる。

ところで、カミュの作品において、「父」とともに顕在化していなかったテーマが「アラブ人」である。アラブ人については、先行作品で名前のつけられている人物は『唖者』のサイドだけだったが、*Le Premier Homme* では、サイド同様樽工場に働くアブデール(p.120)と隣人のタアール氏(p.213) が名付けられることとなる。もっとも、彼らとて、作品世界で光彩を放っているわけではない。しかしながら、「ノートとプラン」から、アラブ人との「友愛」fraternité が、カミュの作品にあっては初めて描かれる可能性のあったことがみてとれる(p.278参照)。作品の中には、すでに、53年当時のアルジェリア社会の状況が時折盛り込まれていたのだが、物語の進展とともに、アルジェリア戦争に対する、そしてまたアラブ人に対する主人公の肉声が聞けたことであろう。というのも、第三部で、「ジャックは母にアラブ人の問題、クレオルの文明、西欧の運命を説明する」(p.307) 予定だったからである。そしてそこには、おそらく、アラブ人とピエ・ノワールとの共存を願う姿がみてとれたのではなかろうか(pp.320-321参照)？

いずれにしても、*Le Premier Homme* は、未完の大作であり、カミュ研究者にとっては第一級の資料でもあることだけは間違いない。

注

プレイヤッド版によるアルベール・カミュの作品を次のように略記する。

Ⅰ：*Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, 1967.

Ⅱ：*Essais*, Gallimard, 1965.

また、*Le Premier Homme* からの引用については、直接ページを示したが、それらは

すべて、Albert CAMUS, *Le Premier Homme*, Gallimard, 〈*Cahiers Albert Camus 7*〉, 1994 のページを指している。

1）Jeanyves GUÉRIN, *La revanche d'Albert Camus* in *Le Nouvel Observateur*, N°1544, du 9 au 15 juin 1994, pp.4-10 参照。

2）Jean DANIEL, *Un intellectuel contre l'Histoire* in *Le Nouvel Observateur*, *ibid.*, p.4.

3）Ⅱ, p.6.

4）Ⅱ, p.12.

5）例えば、Roger QUILLIOT, *La Mer et les prisons*, Gallimard, 1970, pp.31-32参照。

6）Albert CAMUS, *Carnets mai 1935 – février 1942*, Gallimard, 1962, p.15.

7）*Ibid.*, p.16.

8）1955年8月24日、『追放と王国』の第一稿完成後カミュがグルニエに宛てた手紙からの引用。*Correspondance Albert Camus – Jean Grenier*, Gallimard, 1981, p.201. 邦訳、『カミュ＝グルニエ往復書簡』、大久保敏彦訳、国文社、1987、p.329.

9）Ⅰ, p.2037.

10）Herbert R. LOTTMAN, *Albert Camus*, Seuil, 1978, p.536.

11）*Ibid.*, p.440参照。

12）こうした点からも、余談ながら、1953年を一つの転機とみて、カミュの作品を捉え直す必要があろう。

13）LOTTMAN, *op.cit.*, p.546.

14）Ⅱ, p.20.

15）Ⅱ, p.6.

16）Ⅱ, p.13.

17）カミュが作品に献辞を付すことは多いが、身内に宛てたものは、生前刊行されなかった習作『貧民街の声』を除くと、前作『追放と王国』だけであった。この点からも『追放と王国』の延長線上に *Le Premier Homme* を位置づけることができよう。

18）Ⅱ, p.25.

19）Ⅱ, p.25.

20）巻末に付された「紙片」に、祖母像のプランが、〈La grand-mère, tyran, mais elle servait debout à table.〉(p.273) と記されているが、『裏と表』にはこの〈mais〉以下がなかったといえよう。

21）『追放と王国』におけるレアリスムについては、Peter CRYLE, *L'Exil et le royaume d'Albert Camus*, Lettres Modernes, 1974, pp.31-41 参照。

22）白井浩司、「カミュとグルニエ」、『群像』、講談社、1992年4月号、pp.412-413参照。

23）LOTTMAN, *op.cit.*, pp.31-32参照。

24) Albert CAMUS, *La Mort heureuse,* 《*Cahiers Albert Camus 1*》, Gallimard, 1971, p.83.

25) エルネストと記されていることが多い。

26) Albert CAMUS, *La Mort heureuse, op.cit.,* p.86.

27) それに対し、イヴァールは子供の誕生とともに徐々に海から遠ざかってしまうのだった。Ⅰ, p.1598参照。

28) ロットマンの前掲書にも《une scène de nativité quasi biblique》(LOTTMAN, *op.cit.,* p.19.) との指摘があるし、B. フォコニエも《Le début du récit a des résonances de récit biblique.》(Bernard FAUCONNIER, *Camus : une enfance en Algérie* in *Magazine littéraire,* N°322, juin 1994, p.60.) と述べている。

29) Ⅱ, p.29.『裏と表』では、父について今一つの言及がある。Ⅱ, p.25参照。

30) まさしく「聖地訪問」pèlerinage(p.166) でもある。

31) 「ノートとプラン」から、父の代理はベルナールから、さらに、「私の実の父が死にそして埋葬されたところで生まれ、私が父と認めた」(p.293) J. グルニエへと至る予定だったことが分かる。

32) ロットマンの前掲書による。LOTTMAN, *op. cit.,* p.19 ならびに p.546参照。

33) 拙稿、*Sur l'honneur chez Camus – nouvelle valeur dans L'Etat de Siège,* 《Etudes de Langue et Littérature Françaises》N°60, 日本フランス語フランス文学会, 1992, pp.171-183参照。

Sur *Le Premier Homme* d'Albert Camus

Yosei MATSUMOTO

Dans *Le Premier Homme,* roman autobiographique, longtemps resté inédit mais récemment publié, Camus est retourné, comme il l'avait promis dans la préface de la réédition de *L'Envers et l'Endroit,* à sa propre ⟨source⟩, c'est-à-dire dans le monde de *L'Envers et l'Endroit.* La structure élémentaire est, en effet, la même dans ces deux ouvrages, mais il y a aussi la différence provoquée par le temps. Qu'est-ce qui caractérise ce dernier roman inachevé de Camus?

Tout d'abord la tendance à l'objectivité ressort. Le jeune Camus n'avait pu décrire qu'un côté de son enfance; dans ce roman il réussit,au moyen de la technique réaliste, à dépeindre objectivement non seulement la grand-mère dont il ne montrait que l'image négative dans son premier essai, mais aussi l'univers entier qui entoure le héros et sa famille.

Une autre tendance, c'est la création d'une sorte de Sainte Famille. L'oncle Etienne, qui cohabitait en réalité avec Camus pendant son enfance et qui était dépeint plusieurs fois négativement dans ses premiers ouvrages, est montré sous un jour idéalisé et purifié dans ce roman. En outre, le début du roman où est racontée la naissance du héros, nous évoque le monde sacré de l'Evangile.

Mais il faut aussi faire mention de l'accroissement du rôle du père. Ce thème que Camus n'effleurait que comme épisode, prend une grande importance dans ce roman où le fils recherche toujours en vain l'image de son père. Mais le fils, imaginant non seulement son père mais aussi les quarante-huitards qui ont débarqué sans rien avoir en Algérie, terre inconnue, comme colons, et dont l'histoire est racontée comme une épopée, se sent lié à cette ⟨tribu⟩, à cette ⟨race⟩,

et prend conscience d'être le 〈premier homme qui part de zéro〉 sans père ni aucun soutien. Tel est le sens du titre.

Le Premier Homme nous apparaît comme l'ébauche d'un grand ouvrage épique.